

オチンカパ ↓ 永山一号川

前回までは、旭川のシンボルでもある旭橋の袂で合流する石狩川の大支流のひとつである牛朱別川について述べた。今回からは、再び石狩川の上流のアイヌ語地名を見ていきたい。

オチンカパ(永山一号川)は現在は大雪山が大雪山通の九丁目国道三十九号線跨線橋付近で、正和小学校グラウンド北端〜石北線・宗谷線下を通り、新富三条一丁目目く新富二条一丁目目く東三条十丁目から石狩川左岸堤防沿いに旭川土末現業所裏の金星樋門で石狩川に流入している。長さ約二・二ギバの小河川である。しかし、オチンカパは、左の各記事のように由緒ある河川である。

地図①は、文化四年(一八〇七年)に、石狩川を下った近藤重蔵が「石狩川川筋図」に描いた「ヲチンカバ」で、夷家が

断章 旭川のアイヌ語地名研究

159

高橋 基

二戸描かれている。これが現存する最古の記録である。

安政四年(一八五七年)、松浦武四郎は、「アイヌの人達が漕ぐ丸木舟で石狩川を上り、このオチンカパで一泊する。武四郎は「ヲチンカハ」と表記して、次のように記述している。

ヲチンカハ、右の方、川中拾間計川口平地にて柳多し。式三丁上りて茅野有。此辺平野にて石狩岳・チクヘツ岳・ヘ・ツ岳等能見ゆ。未だ七ツ前(午後四時頃)とも思えども、召連れしピヤツトキの家有るよしに附き、上陸して泊る。

現在も、花咲大橋や石狩川堤防から、大雪連峰や十勝連峰が望見できる。なお、松浦武四郎は、ヲチンカハでの往時の住人を追記し、最後にその夜の出来事を、次のように結ぶ。夜更けるや、豺犬(註一)山犬、狼の類)処々にて吠え、実に物すごくぞ覚えたりける。」



松浦武四郎は、地図②の石狩川左岸の地は

「惣て此辺平地に御座候。漁猟畑作十分見込み有し之申候。」と記し、道路は、アイヌの人たちの「往来道有し」の候間、是より三里斗の川上じ、(比布迄)の処は別段新道は切開候には不_レ及申_一候。(札幌越大新道申上書)

と、現在の旭川から、永山・比布までの間は、アイヌの人達の道路を利用でき、道路開削の必要はないと報告している。

明治二十年、内務省地理局改正北海道全図では、「ヲツエンカバ」。高橋不二雄の『札幌真巡回日誌』では、「ヲチンカバ」には、「二戸の住居があった」と記録している。

明治二十二年、北海道庁「石狩原野植民地撰定概図」の「オチンカバ川」では、「道庁殖民課の福原鉄之輔が、「石狩川二近ヅクニ、從ヒ地味彌彌肥沃トナル。字「キンクシベツ」並ニ「ヲチンカバ」近傍は最モ豊饒ナル所ナリ」と報告している。

★松浦武四郎地図による牛朱別川以東の田永山村石狩川左岸アイヌ語地名
Hはコタン(集落)の印
―は― 内は現河川名及び現在住所



の表層壤土の原因を、次のように解明している。アイヌ毎年一回若しくは二回、草原二放火して、枯草ヲ燃燒スルヲ慣例トス。其際草莖枝根ノ一部ハ、為メニ炭化シテ永久不滅ノ質性ニ化シ、累年堆積土壤に混和し、遂ニ此一種奇異ナル黒色ヲ呈出スルガ如シ。

右のような事情で、明治二十四年に入地した永山屯田兵村は、多くは草原地だったために、開墾達成期間が、屯田兵村史上最も早かったと言われた。

明治二十三年に旭川を調査した永田方正は、「オチンカバ」の地名解を次のように記した。
オチンカパ(Ochin-kapa)―熊皮を乾す処
昭和三十七年発行の『永山町史』によると、「永山でも開拓当時は、熊の出没が多かったと書いている。」
アイヌ語地名研究会幹事

※毎月第一週号に掲載します